

## < 口腔の役割 >

### 喫茶店のおみくじ器

近年、よく耳にする「昭和レトロブーム」は昭和時代、特に昭和 30～50 年代の高度経済成長期が中心の温かみのある雰囲気やノスタルジーな文化、生活様式を懐かしみ、その時代の映画、音楽、建物、ファッション、雑貨、デザインなどが再び注目を集めている現象をいいます。SNS や学校の社会科の授業を通じて当時を知った若い世代の人たちが「エモい」、「映える」といった令和の視点で昭和の文化、生活様式に興味を持っているようです。

一方で私たち昭和を生きた世代にとっては、便利なスマートフォンを持ち人と人との関わり方も変化しつつある現代と比較して、当時、何ら不便も感じずに生活していた懐かしい思い出が呼び起されます。思い出は人それぞれですが、私の場合は親にレストランに連れてもらった際、テーブルの片隅にあった「ルーレット式おみくじ器」、通称“不思議とあたる愛の星占い”です。昭和のレストランや喫茶店の定番であり、記憶にある人も多いはずです。子供の頃親に何度もおねだりしたものの、100 円を投入しなければならず、結局一度もやらせてもらえませんでした。今では当時の懐かしい思い出です。

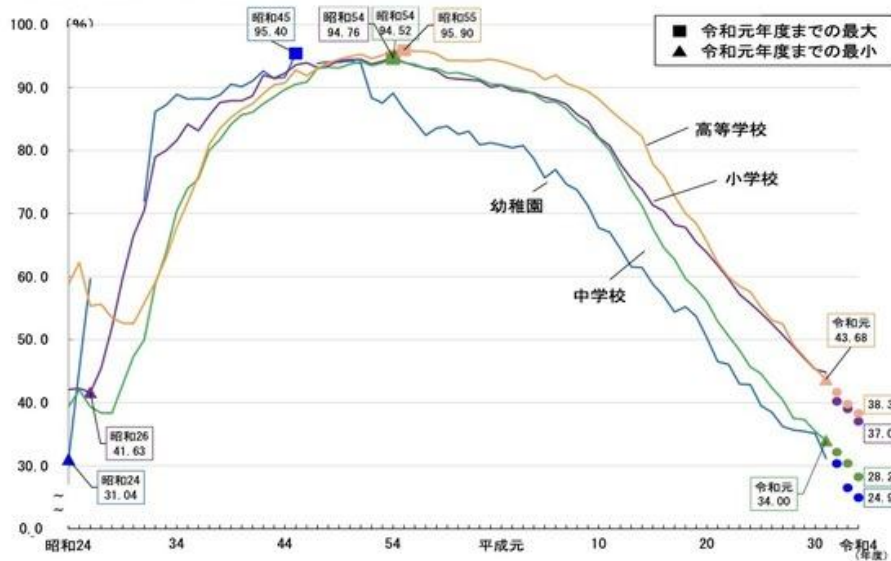


ルーレット式おみくじ器  
“不思議とあたる愛の星占い”  
(有)北多摩製作所製

<https://kitatama-omikuji.com>

実はこの昭和高度経済成長期は子供のむし歯が非常に多い時期でもありました。昭和 30～50 年代、幼稚園児、小中高校生のすべて例外なく、むし歯がある割合は実に 90%を超えていました。(文部科学省 令和 4 年度学校保健統計)

○むし歯（う歯）の者の割合



注：幼稚園については、昭和27～30年度及び昭和46年度は調査していない。

文部科学省 令和4年度学校保健統計（令和5年11月28日）

[https://www.mext.go.jp/content/20231115-mxt\\_chousa01-000031879\\_1a.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20231115-mxt_chousa01-000031879_1a.pdf)

今でこそ歯科医院は身近なものとして普及し、令和4年以降、子供のむし歯はおおよそ30%にまで激減しています。現在はかかりつけ歯科医院での定期歯科検診やフッ素塗布などの予防歯科は当たり前となっていますが、当時は歯科医院の数は決して多くなく、毎食後の歯磨き習慣はなく、子供の歯に注意を届かせられる親も今ほどは多くなかったことが理由です。

さて昭和のおみくじ器の話をしました。昭和に限らず「占い」や「運勢」に興味をもつ人は今も昔も多いはず。 「手相学」や「人相学」はよく知られていますが、実は「歯相学」なるものが存在します。古代中国で誕生した人相学は3000年の歴史があり、例えば「目は中年運」を表し、「口元は晩年運」を表すといわれます。目が生き生きと輝いていれば仕事は順調、歯が丈夫で何でも噛めれば老いてもますます意気盛んに過ごせることが想像できます。では「歯相学」はどうでしょうか。これも人相学同様、統計的に歯の大きさや白さ、形、歯並びや出っ歯、隙歯、八重歯などから性格や運勢がわかるというものです。歯が白く、歯並びが良ければ笑顔に自信を持つことができ、社交的にもなり、対人関係や恋愛運も上昇、さらに明るく健康的な印象から運気が上昇するということでしょう。

地域に歯科診療体制が整備された現在、かかりつけ歯科医院はむし歯の治療や歯の清掃をしてくれるだけではありません。歯並びやホワイトニング、金属に代わる被せものの治療についても気軽に相談してみてください。さらに運気が上昇するかも知れません。

【歯科口腔外科診療部長 今井 正之】

